

エルムズカレッジ長期留学最終報告書

看護学部看護学科 3 回生 乾凜華

私は、アメリカのマサチューセッツ州にあるエルムズカレッジに 2025 年 9 月から 2026 年 5 月まで留学した。

渡航前に学生ビザの取得のために、アメリカ領事館で面接を受ける必要があり、面接予約前に必要な情報の入力を終えて予約枠の選択画面に進むと、予約可能枠なしと表示された。5 月からアメリカの留学生ビザの受付が一時的に停止されていたことにより、解除されてから予約枠に人が殺到し、まったく予約が取れなかった。大阪の領事館には予約枠は追加されないという情報を得て面接会場を東京に変更して毎日 30 分おきにアメリカ領事館のサイトを開いて予約枠が追加されていないかを確認して、本当に留学に行けるのか心配しながら過ごしていた。7 月の末にようやく取れた 9 月の枠で、面接をしてから書類が手元に届くまでも時間がかかるため、面接の日時を早めてもらうために、エルムズカレッジの国際交流担当の方から、授業が 9 月から始まるためそれまでに渡航する必要があるという旨の文書を送ってもらい、早く面接を受けるための緊急リクエストという手続きをして、8 月 20 日にビザの面接を受けることができた。その後書類が家に届かないトラブルがあり、配送会社に何度も連絡してようやく航空券を予約し、9 月 8 日にエルムズカレッジに到着した。授業が始まる最初の週には間に合わず、秋学期の 2 週目から参加することになった。前回、前々回にエルムズカレッジへ留学した先輩から、授業が始まる約 1 週間前に始まる、ボランティア活動などを行って学生同士の交流を図るイベントがあり、そこで友達を作ったという話を聞いていて私も参加したいと思っていたが、間に合わなかったため、友達ができるか少し不安な状態で留学を始めることになった。

秋学期は、ESL (English for second language)、FYE (First Year Experience)、宗教、ヘルスアセスメントを履修し、春学期は、ESL、哲学、基礎看護の授業を履修した。一回生の多くが履修する、FYE では、課題図書が課せられて、本の中の内容を 5～6 人のグループで話し合って発表する授業と、秋学期を通して同じメンバーの 6～8 人のグループで、学校生活の中で困っていることを解決するための製品のアイデアを考えるイノベーションチャレンジという 2 つの内容が並行して行われた。

課題図書に関する授業で読んだ本は 300 ページ以上あり、私のリーディング能力では難しすぎる内容だった。虫のような形をした宇宙人が登場人物で、さまざまな種族が宇宙で緊急事態に陥り共生のためお互いを理解しようとするという本だった。私は、登場人物は人間のつもりで読み進めていたため、何度読んでも理解できなかった。最初の授業での課題がその本を読んで 3 つの問題に回答するという内容で、文章を読んでも理解できないし、問題文の意味もよく分からなくて、休みの日 1 日図書館で課題に取り組んで 1 問も終わらなく

て、自分は全然英語ができないと落ち込んだが、寮の同じ階にいる授業中に仲良くなった子の部屋に分からないことを聞きに行くと、「私は英語話者だけど分からない」と言っていて、ほかの同じ授業を取っている子に聞いても、難しすぎると話していたことで自分ができなさすぎるわけではないかもしれないと気が楽になった。後日担当の先生に質問に行くと、どのあたりの文章が重要かを教えてくださり、課題を終わらせることができた。

グループ活動の授業ではメンバーは先生の方で決められていて、最初の授業で、どんな製品のアイデアにするのか話し合った。私たちのグループは、学校内で電波が悪くて不便な思いをすることがあるため、ポケット Wi-Fi のような製品についてプレゼンテーションをすることになった。そこまでは話の内容は理解できたが、どの年代をターゲットとした製品なのか、予算をどうするのかなどの話になったときに聞いたことのない単語ばかりが飛び交うようになって話の内容についていけなくなった。話し合った内容をワークシートに記入しておく必要があったため困っていたら、授業の終わりに同じグループの一人が、私が理解しやすいように言い換えてくれて、その子が紙に書いた内容も見せてくれて、ワークシートを埋めることができた。その後の授業では、パワーポイントを作りかけの段階で、今の段階できているところまでを発表する時間があつた。私が担当するスライドの番になったが、スライドには必要最低限の内容を書いているだけで、原稿を用意する段階でもなかったため、なんといえいいか分からずに黙ってしまって、結局ほかのメンバーが私の代わりに説明してくれた。その中間発表の評価には、メンバー全員が発表に参加するようにと書かれていたため、申し訳なく感じた。その後、私が発表しやすいスライドを選ばせてくれて、発表の文章がおかしくないかを確認してもらって本番当日は文章を覚えて原稿を見ずに話すことができた。グループ活動の授業が始まってすぐは、自分はあまりアイデアを出せないし、ほかのメンバーは自分のことを迷惑に感じているかもしれないと思って分からないことがあっても聞き返せなかったが、活動が進むにつれて、質問すればみんな嫌な顔をせずに教えてくれると気づいて、話し合いの中で知らない言葉があつたときに「それはどういう意味？」と聞けるようになった。

第二言語話者向けの英語の授業週に2回で、教科書の文章を読んで問題を解いていく形式だった。受講者は私しかいなかったため、分からないことがあればいつでも質問することができた。教科書の質問の中には文章の中から正解を見つけるものだけでなく、自分の意見が問われる質問が多かった。私は、留学の申し込みのために必要な TOEFL の試験のスピーキングの対策をしている時に、「～の課題に対する自分の意見を述べなさい」というような問いの時に、英語で言えないからではなく、そもそも自分の意見が思いつかないという理由で苦戦していたため、英語の授業で批判的思考が求められるような問いがあつたときにも困って、最初は先生が助け舟を出してくれて答えることが多かった。しかし、日本とアメリカとの比較や、学生・社会人の立場など様々な視点を考えるという方法を教わって、自分の意見を述べられるようになった。

宗教の授業では、前半にイスラム教、ユダヤ教について、後半は主にキリスト教について学んだ。テストの前にキリスト教の中でもいくつも分かれている宗派の中から選んでプレゼンテーションを行う課題があり、私はアドベンティスト教会という宗派について調べた。2人で発表の準備をして練習もしていたが発表の授業の当日、大雪でその日の授業が全部なくなったため、発表はなしで評価のためにパワーポイントを先生に提出するだけになって、時間をかけて準備したため少し残念だった。講義の中で、キリスト教に関する有名な人物や用語はもともと全員知っているものとして授業が進められるため、私はもともとの知識が少なく授業についていくのに苦労した。

ヘルスアセスメントの授業では、講義と演習の授業があった。講義の中では、日本の看護の授業で学んだ概念やアセスメントの方法など、同じ内容のものも多く、これまでの学習内容を振り返りながら理解を深めることができた。日本で学んだ内容と異なる点として、患者さんの情報収集の際にその人の信条はなにかによって何をされると嫌なのかが異なるため、アセスメントに入る前に患者さん本人に必ず確認する必要があると学んだことが印象的だった。看護の授業では、定期テストとは別で国家試験の状況設定問題のような、患者のバイタルサインやシチュエーションが提示されて、その際の看護師の適切な言動を4択から選ぶという形式の50問のテストが3回と、毎回の授業の最初に10問の疾患名の単語テストがあった。単語テストは、単語とその意味が書かれたプリントが配られて、毎回指定された20単語の範囲の中から10問が出題されたため、その範囲を勉強していれば点数がとれたが、毎回範囲を勉強して臨んだが3回の50問のテストと期末試験は、範囲は指定されているものの、授業では出てこなかった医療英語がたくさん出てきて、意味を予測することも難しいため、知識としては知っているのに単語の意味が分からないから解けない問題が多かった。分からなかった言葉は、試験中に計算用紙として手元に置いている紙にメモをしておいて、テストが終わってから意味を調べて復習するようにしていた。また、点滴の滴下時間などを計算する問題では、重さ、液体などすべての単位が日本で使われているものと異なるため全く解けないこともあった。

哲学の授業では、ソクラテスやアリストテレスなどの有名な哲學家について学んだ。哲学は高校の授業で勉強したことがある内容もあったため、授業の内容を理解することは比較的難しくなかったが、授業後の課題で動画を視聴して学んだことを4つ挙げるという課題が出されることが多く、その動画に字幕が付いていないこともあったため、内容を理解するために何度も繰り返し再生する必要があったため、動画自体は3〜4分しかないが課題を終わらせるのに1時間半ほどかかったこともあった。

渡航前に受けたTOEFLの点数は60点で、簡単な会話ができる程度で、特にリスニングに不安があったが、授業を受けることや、友達と毎日会話することで留学前よりもリスニング能力もスピーキング能力も向上したとを感じる。英語の授業で新しい語彙を学んで、友達と

の会話のなかでは、カジュアルな表現を学んだり、発音が難しい言葉を友達が根気よく教えてくれたりして、発音の仕方を習得することができた。授業中に視聴する動画のスピードが速くて途中で「字幕を付けてもらえますか」と先生に伝えた時には、授業終わりに「あの動画はすごく早口でほかにも追いつけていない学生がいただろうから言ってくれてありがとう」と先生が声をかけてくれ、勉強していて言葉の意味や発音が分からないときに友達はもちろん、図書館の近くで勉強している学生や、カフェテリアのスタッフの方など、誰に聞いても快く答えてくれて、周りに英語の先生がたくさんいる素晴らしい環境で学ぶことができた。また、大学院の授業を受けながらエルムズで働いている社会人の方が日本語を勉強していて、英語を教える代わりに日本語を教えてほしいと声をかけてくれて、その方は以前小学校の英語の先生として働いていたため、説明がすごく分かりやすくて授業がない時間に「この単語とこの単語の発音の違いが分からない」などの質問をしに行って、その後に私も日本語に関する質問に答えてお互いに教え合っていた。

留学に行く前は、アメリカの大学に通って入れば毎日英語を喋る機会がたくさんあってすぐに上達するだろうと考えていたが、同じ授業を受けている子が寮の同じ階に住んでいて、洗面所などであったときにあいさつや短い会話をすることはあったが、授業を受けている時間以外は基本一人で過ごすため、英語を聞いている時間は長くても実際に自分が喋っている時間はあまりなく、寮で話す友達も基本同じ部活の子と一緒に行動しているため、私も何かのコミュニティに参加したいと考えていた。留学が始まって1か月ほど過ぎた頃、学校内のジムを利用していた時に近くでトレーニングをしていた学生に話しかけると水泳部の子で、私は小学生の間スイミングスクールに通っていたことがあると話すと、今からでもチームに参加できると教えてくれたため、水泳部に入ることにした。水泳のシーズンは9月から2月ごろまでで、練習は、平日はほぼ毎日2時間あり、秋学期は月・金は朝5時から7時、火・水・木は午後6時から8時まで、春学期の2月までは月～金の午後6時から8時だった。練習に参加する前はコーチの指示が聞き取れなくて練習の進行を妨げてしまうかもしれないと心配していたが、英語が第一言語の人も聞き返したり、単純に話を聞いていなくて何度も質問する人もいて、遠慮なく分からないことを聞けた。日本では、大学よりも中学・高校で学生がスポーツに熱心に取り組む人が多い印象があるが、アメリカでは、大学でのスポーツがすごく盛んなことに驚いた。水泳に必要な練習用具や水着などを持っていなかったが新品を支給してくれて、月に何度かあるほかの大学への移動や大会後の食事なども大学のお金で支払われて、ほぼ自費の負担が無く活動に参加できたため、スポーツをする学生への支援の手厚さに驚いた。練習に参加するようになってからは、練習が終わった後に夜ご飯と一緒に食べたり、練習のない日に一緒に遊びに行ったりした。月に1～2回他の大学のプールに行って大会にも参加した。エントリーする種目は自分では選べずコーチが決めることになっていた。私は、平泳ぎ、背泳ぎ、100メートル個人メドレーを泳ぐことが多かった。コーチはすごくスパルタで、200メートル自由形はやりたくないと言っても勝手にエントリーさ

れていたし、練習もすごくしんどいメニューが多かった。早起きや厳しい練習など大変なこともあったが、水泳部に入ったことで、友達も増えたし、ご飯を食べているときなど会話の時間も増えて、留学生活が充実したものになった。

3月に学校の近くにある病院を見学させていただいたときには、日本では看護師に対してその日に担当する患者さんが振り分けられていて担当の患者さんのケアを検温、食事介助など1人の看護師がさまざまな業務を行うのに対して、アメリカでは、注射・点滴を行う看護師、患者さんの話を聞く仕事の人など、業務が分けられていることに驚いた。国民全員が必須で加入している保険がないため、保険なしで受診した場合費用が莫大になるため、軽い症状だと受診しない人も多いと聞いた。また、病院を予約してもすぐに受診できるわけではなく、留学中お世話になった大学の先生は、これまで診てもらっていたかかりつけ医が引退したため、新しいかかりつけを見つけるために約1年半かかりさらに受診までは6か月後待つ必要があると聞いて驚いた。また、病院内で働いている医師、看護師が誰もマスクを着けておらず、マスクは必須ではないのか質問すると、10月から3月までのインフルエンザが流行する期間以外はマスクをつけるかは個人の自由となっていると教えてもらった。

渡航前に学校の付近は比較的治安のいい場所だと聞いていたが、暗くなってきたら外出しないように先生や友達から念を押され、日本で夜に一人で歩いて外出できるということがとても貴重な環境なのだと感じた。5月に日本へ帰る前にワシントンD.Cへ行ったときに、ホワイトハウスの前を通ると、一般人が侵入できないように建物の周りの公園のようなエリアごと高い柵で覆われていて、周囲では大きい銃を持った警察官が警備をしており、警察のヘリコプターが何機も飛んでいて緊張感があった。留学中にアメリカの他の州では大学内での銃撃事件があり、注意喚起のメールが届くこともあって、日本との治安や安全に対する意識の違いを実感した。

様々なバックグラウンドを持つ学生と一緒に生活し、授業を受け、様々な経験を通して多くの学びを得て成長することができた有意義な留学となった。

最後に留学を支えてくださった高知県立大学の先生方、事務の皆様には感謝申し上げます。留学の準備から留学中、帰国まで多くのご支援をいただき、貴重な経験を積むことができました。心より感謝申し上げます。

